夕焼け通信 1303号　2021.4.26
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２） 49

木幡智恵美

送り迎え（3）

平日は二人の孫を保育所に送り迎えし、土曜日は娘が三人の子を連れて我が家に来るという日々が半月ほど続いた。そうした中、新型コロナウイルス感染がじわじわと広がりを見せ、二月末には、首相が全国の小中高等学校に週明けから休むようにとの要請をする。点訳勉強会、手話教室、合気道の稽古もみな中止となった。

そんな折、義母がベッドの柵に手をつき損ねて転倒。整形外科で診てもらうと、圧迫骨折とのこと。ようやく三か月前の圧迫骨折が落ち着き、手すりを伝って歩くようになっていたのに、また逆戻りだ。起こすのも寝せるのも夫と二人掛かり、移動は車椅子、またまた介助の度合いが増えた。

二男は、老朽化した施設での作業で夏が来る度に「もう耐えられない」と言い続けて数年、ようやく新しい施設が建ち、快適に仕事ができると張り切っていたのに、二番目に古い職場に異動になってしまった。

長男には三月になったら会いに行くと言っていたが、新型コロナの広がりに加え、義母の介護があり、行くことができなくなった旨をメールすると、「花粉症がひどいのに、マスクが手に入らない」とのこと。行くことはできないので、せめてマスクを送ってやろうと、家じゅうのマスクをかき集めて送った。

娘が、「そろそろ、自分で送り迎えをしようかと思って。ただ、水曜日は歯医者を予約してるけん、その間宗矢を預かってくれる。多分一時間くらいで終わると思うに」と言う。水曜日の朝、車椅子に乗せた義母をデイサービスに送ると、すぐに娘は宗矢を預けにやってきた。寛大と実歩を保育所に連れて行き、一旦帰って宗矢に乳を飲ませた後、通いつけの歯科へ向かった。いつものことながら、娘が言う時間は当てにならない。二時間後にようやく戻ってきた。宗矢は寛大や実歩の時ほど大泣きはしない。我が二男が産まれた後、年を取ってからの子だから、あまり親に手を掛けないように育ってくれていると話していたが、何の何の、歩きだしてからが大変だった。宗矢はどうなるのかな。

人生の誰彼 4

今岡　幹

逃げるが勝ち

勤務先で二十年近くに渡り、私は毎年四月一日に入社する高卒の新人社員たちのお世話係りを続けてきました。

今日から社会人なぞと大層なことをいってもほんの少し前までは高校生、会社の中では迷える子羊ちゃんみたいなものです。年を重ねるにつれ、この掴みどころの無い、打っても響かぬ新人君たちとどう接したらよいのか解らなくなってきていました。こっちが解らなければ向こうも解らないに違いありません。次第に若い人たちを相手に尤もらしいことを喋るのに違和感（というか苦痛）を覚えるようになり、私自身も定年を迎えるし、昨年の四月を最後に新人社員の研修担当は辞退したいと上には申し出ておきました。

ですが油断は禁物。ルーティンを変えようとしない会社の体質上『今年もとりあえず新人研修は今岡に任せよう』などということにもなりかねません。そこで私は先手を打つことにしました。四月一日に有給休暇を取ってしまえばよいのです。新人教育は一日では終りませんが、出鼻をくじけばこちらのものです。案の定、話の流れがこっちにきそうになったので『一日は用事があって休みますので・・・じゃあ後はお願いします』でお仕舞いです。こういう姑息な手段はとりたくなかったのですが、知らぬ顔で逃げるが勝ちです。

思い起こせば四十二年前の春、私は迷っていることにさえ気付いていない哀れな子羊でした。当時会社の新人研修担当だった方は優しくて面倒見の良い人でしたが、今はもうこの世の住人ではありません。私はその人のご指名により後を継いだのですが、口下手で社交性ゼロ以下の自分が何故選ばれたのかは謎のままです。頼まれたら嫌とはいえない性格を見透かされていたのでしょうか。他に適任者がいたであろうにと今更いっても詮無いことですが。

さて、件の四月一日は、風は少々強いものの晴れ間が広がる穏やかな天候でした。妻が仕事に出掛けた後、洗濯をして、暖房器具を片付けて、掃除をして、暖かくなってまたぞろ目立つようになった庭の草取りをして、買物に行って、夕食のカレーを作りました。

こんなに自由気ままな四月一日を迎える事ができるなんて夢のような思いでした。いっそのこと退職してしまいたいとつくづく感じた一日でした。

30代フリーター　やあ、ジイさん。新型コロナウイルスの流行で外出の自粛が広がったとき、「いのち支える自殺対策推進センター」（一般社団法人）に自殺を考える人たちから「社会全体が自分と似た状況になり、気持ちが楽になった」という声が寄せられるようになったそうだ（朝日新聞デジタル、4月10日）。

年金生活者　そこから推知できるのは、たとえばひきこもりは他者を避けながら他者を切実に求める行為だということだ。

もしひきこもることが他者とのかかわりを一切拒むことだとすれば、「社会全体が自分と似た状況にな」ろうとなるまいとどうでもいいことで、「気持ちが楽になった」りすることもないだろう。ひきこもるという行為が、他者あるいは社会との同調、つまり強いかかわりを希求する行為でもあることをそれは示している。「ヒトは社会で生きることを尋常でないほど切望する動物なのです」（ダニエル・コーエン、『新しい世界　世界の賢人16人が語る未来』から）

ただし、ひきこもる人間が求める他者あるいは社会は、いま現に存在する他者あるいは社会ではなく、自分が理想とする他者あるいは社会だ。そのひとつが「自分と似た状況にな」った他者あるいは社会にほかならない。だが、他者全員、社会全体がひきこもりになることはあり得ない。あるとすれば、ひきこもることとひきこもらないことを同等に扱う他者あるいは社会ということになる。それはひきこもる個人を超えて社会の理想になり得る。

30代　ひきこもる、ひきこもらないの差は何だ。

年金　他者をめぐる現実と理想の分裂の深さが人をひきこもらせる。生誕時あるはその前後に負ったトラウマの深さがその分裂を深くする。

生誕とは母胎の楽園を追われて荒れ野に放り出されることであり、快感と万能感に代わって不快と無力感に支配されることを意味する。そのときの楽園と荒れ野の落差がもたらす衝撃がトラウマを生む。そのとき、あるいはその前後に、別の衝撃が加わると、その落差はいっそう大きくなり、トラウマは深まる。別の衝撃として想定されるのは、生まれたばかりのときに過って床に落とされたとか、胎内にいるとき母の感情が乱れることが多かったとか、生まれたあとの授乳がよく途切れたとか、といったことだ。

ひきこもりがはらむ現実の他者と理想の他者との分裂の深さは、荒れ野と楽園の落差の大きさを反映したものだ。ひきこもる人間は理想の他者として、母胎としての母を求めているといってもいい。そこには個人としての他者は存在しない。つまり現実の他者はいない。母胎とは全宇宙でもあるからだ。

30代　ひきこもりは消費するだけで生産しないと思われている。

年金　吉本隆明はそれに異議を唱え「一人でこもって過ごす時間こそ『価値』を生む」と語った（『ひきこもれ』）。

それはどんな価値か。商品を生産しているわけではないから交換価値ではない。自給自足をしているのでもないから使用価値とも違う。ひきこもってだれとも話さず、自分とだけ話しているうちに生まれてくるのは、自分が何者であるかという自問であり、それに対する自答だ。

それはおのれのトラウマがわかってくることでもある。トラウマは宿命と言い換えてもいい。それを知ることが自分のアイデンティティーを形づくり、それが他者との対話の土台ともなり得る。それは価値と呼んでいい。

30代　たいていの人間はひきこもることなしにその土台をつくる。

年金　吉本はこう言っている。「世の中の職業の大部分は、ひきこもって仕事をするものや、一度はひきこもって技術や知識を身につけないと一人前になれない種類のものです。学者や物書き、芸術家だけではなく、職人さんや工場で働く人、設計をする人もそうですし、事務作業をする人や他人にものを教える人だってそうでしょう」（『ひきこもれ』）

そしていつも人前に出ているように見えるテレビのキャスターについても「皆が寝静まった頃に家で一人、早口言葉か何かを練習していたりするのではないでしょうか。それをやらずに職業として成り立っていくはずがない」と指摘している（同）。

ニュース日記　781

中村　礼治

ひきこもりは何を生むか

30代　「一度はひきこもって技術や知識を身につけ」る作業は自らを労働力として再生産することだ。それに励む人たちと、そういうことをしないでひきこもる人たちは対照的な存在と見られている。

年金　ひきこもるという行為は、自分が何者であるかをめぐる自問自答を通しておのれのアイデンティティーを形成する作業だから、アイデンティティーを生産していると言ってもいい。労働力の生産はすでに形成されたアイデンティティーに新たな要素を加えることなので、部分的、一時的なひきこもりで済む。これに対して、ひきこもる人たちはいまだ形成されていない自分のアイデンティティーを一から生産しようとしている。それには部分的、一時的なひきこもりでは間に合わない。その人たちは大多数の人びとが生涯の早い時期に形成するアイデンティティーを何らかのトラウマに妨げられて形成できなかったと考えることができる。